

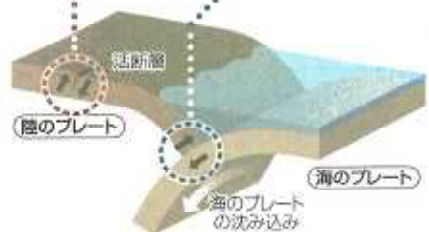
# 大地震リスク 全国に

地図は、全国に分布する活断層で発生する地震（内陸直下型地震）や、沖合などで起こる海溝型地震の規模や発生確率などを反映して作られた。赤色に近づくと揺れが強い揺れに見舞われる確率が高いことを示している。「高い確率」に位置付けているものが以上という数値は、身近なリスクにならざるをえない。交通事故で死亡する確率（0.2%）や、火事に遭う確率（1.9%）を大きく上回っている。

日本中でこうした大きな揺れに見舞われる恐れがあるのは、地球表面を覆う十枚のプレート（岩板）のうち、4枚が日本周辺の地下で複雑にぶつかり合っているためだ。海側のプレートがぶつかり合う動きに、陸側のプレートが巻き込まれてひずみを蓄積。これが、プレートの境界や活断層などを動かし、それぞれ海溝型地震や内陸直下型地震を引

## 内陸直下型地震と海溝型地震の違い

- | 内陸直下型地震   | 海溝型地震   |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>活断層などが動いて発生</li> <li>国内には約2000本の活断層があるとされ、それぞれ1000〜数万年間隔で動く</li> <li>震源が浅く、大きな被害が生じることがある</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>プレートの境界などが動いて発生</li> <li>数十年から100年程度の比較的短い間隔で発生</li> <li>内陸型よりも大きな地震が起きたり、津波が発生したりすることがある</li> </ul> |



で発生し、死者は最大で約32万3000人になると予想されている。一方内陸直下型地震は、今年4月の熊本地震や阪神大震災のように活断層や陸域の浅い場所でも発生。海溝型よりも規模は小さいが、震源が浅いため、市街地直下で起こると大きな被害が出る。

## 日本周辺プレート密集

2016年版「全国地震動予測地図」が公表された。耐震性の低い建物が壊れる目安となる震度6弱以上の揺れが30年以内で「見舞われる確率を」「やや高い」「高い」3段階を示す「オレンジ色」や「赤色」に塗り分けられた。地図では、日本全国どこでも大きな地震に見舞われる可能性が改めて浮き彫りになった。

2007年7月  
新潟県中越沖地震  
M6.8  
死者15人 被害1331棟



2004年10月  
新潟県中越地震  
M6.8  
死者68人 被害3175棟

2003年9月  
十勝沖地震  
M8.0  
死者2人 被害116棟

2008年6月  
岩手・宮城内陸地震  
M7.2  
死者23人 被害30棟



2011年3月  
東日本大震災  
M9.0  
死者1万8452人 被害12万1806棟



2016年4月  
熊本地震  
M7.3(本震)  
死者50人 被害7417棟 (10日現在)



1995年1月  
阪神大震災  
M7.3  
死者6437人 被害10万4906棟

糸魚川-静岡構造線断層帯  
M7.4-7.7程度

中央構造線断層帯  
M6.9-7.7

日奈久断層帯

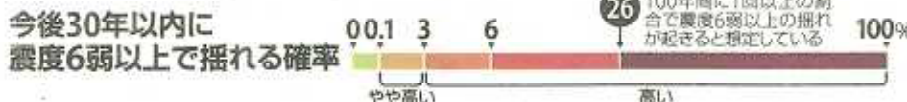
布田川断層帯

南海トラフ

相模トラフ

日本海溝

## 最近の主な地震と今後の被害想定



死者・行方不明者 全壊した住宅  
30年以内の地震発生確率が3%以上の活断層

熊本地震は熊本県の発表、東日本大震災は警察庁の発表、その他の地震は理科年表を基に作成。想定地震の被害は最大値。活断層は、地震調査委員会の資料を基に書き加えた。

政府は26%を超える100年間に1回以上の割合で震度6弱以上の揺れが起きると想定している

| 想定      | 南海トラフ巨大地震 (M9.1) | 相模トラフ地震 (M8.2) | 首都直下地震 (M7.3) |
|---------|------------------|----------------|---------------|
| 死者      | 約32万3000人        | 約7万人           | 約2万3000人      |
| 全壊・焼失建物 | 約238万6000棟       | 約133万棟         | 約61万棟         |

### 必要な備蓄の例

- 食料 (アルファ米、ビスケット、板チョコ、乾パン、缶詰など)
- 飲料水 (1日1人3リットルを目安)
- 携帯用トイレ
- 下着・衣類
- トイレ用ペーパー
- マッチ、ろうそく
- カセットコンロ
- 非常用持ち出し袋 (飲料水、食料、貴重品、救急用品、ヘルメット、マスク、軍手、懐中電灯、下着・衣類、毛布、ラジオ、乾電池、カイロなど)

※南海トラフ巨大地震など広域に被害が及ぶ場合、1週間分以上の備蓄も必要

最低3日分推奨1週間分※

地図は、全国に分布する活断層で発生する地震（内陸直下型地震）や、沖合などで起こる海溝型地震の規模や発生確率などを反映して作られた。赤色に近づくと揺れが強い揺れに見舞われる確率が高いことを示している。「高い確率」に位置付けているものが以上という数値は、身近なリスクにならざるをえない。交通事故で死亡する確率（0.2%）や、火事に遭う確率（1.9%）を大きく上回っている。

## 備蓄最低3日分、耐震診断も

津波や火災によって避難が必要な場合以外、避難所ではなく家で暮らす方が便利だ。地震による家屋の倒壊から命を守るためにも、地震が起きる前に耐震診断を受け、自宅が強い揺れに耐えられるのかを確認してほしい。家族を固定しておくことも必要だ。

津波や火災によって避難が必要な場合以外、避難所ではなく家で暮らす方が便利だ。地震による家屋の倒壊から命を守るためにも、地震が起きる前に耐震診断を受け、自宅が強い揺れに耐えられるのかを確認してほしい。家族を固定しておくことも必要だ。

## 低確率でも備え必要

慶応大 大木聖子准教授



地震動予測地図をどう読み取り、どう活用すればいいのか。災害情報や防災教育に詳しい慶応大の大木聖子准教授に聞いた。

「地震動予測地図をどう受け止めるべきか。地図は、大きな揺れに見舞われる確率を示したものの、黄色の地域は備えなくてよい」「赤色だから備えなければ」と判断するのは誤り。低確率の地域であっても、大地震が起きることは十分にありうる。すべての場所でも地震に備えた行動をとってほしい。

「地図は、全国に分布する活断層で発生する地震（内陸直下型地震）や、沖合などで起こる海溝型地震の規模や発生確率などを反映して作られた。赤色に近づくと揺れが強い揺れに見舞われる確率が高いことを示している。『高い確率』に位置付けているものが以上という数値は、身近なリスクにならざるをえない。交通事故で死亡する確率（0.2%）や、火事に遭う確率（1.9%）を大きく上回っている。」